広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	Malrauxの”La Tentation de l'Occident”について
Author(s)	林, 道恵
Citation	フランス文学 , 8 : 15 - 25
Issue Date	1966-07-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00040874
Right	
Relation	

Malraux の "La Tentation de l'Occident" について

林　　道　　恵

I

"西欧の誘惑"："La Tentation de l'Occident"（以下略号 TO で示す，なお他の略号については後註参照のこと）は André Malraux の初期の作品である．この作品については Fitch が Claude-Edmonde Magny の言葉を引用しながらその重要性を強調して，〈この作品 TO の中には Malraux 文学のすべてのテーマが含まれているばかりでなく，その小説の謎を解く鍵もかくされているように思う〉(DURM p. 3) といっている．TO は n'est qu'à demi de son style, mais qui est totalement de sa pensée et de son tempérament (MPLM p. 13) という Picon の言葉からもその重要性が充分うかがえる．その他 Frohock もその点を指摘し，さらに Hoffmann の考えも同じである．このように Malraux の作品の中における TO の位置ないしその重要性は多くの研究者が一致して認めているところである．そしてその重要性の性格を一言でいえば，後年の Malraux 文学の萠芽がこの初期の作品 TO の中に発見されるといえるであろう．本稿ではこのような萠芽説に基いて幾つかの問題を考察してみたいと思う．

上に引用した Picon の言葉の通り，TO の文体は未完成な状態にあるが，Fitch も〈文体は満足すべきものではない，省略形が多く，思想内容は別として，その表現には的確さを欠き曖昧さが目立つ．細かい点まで書かれていないばかりでなく，大筋も一読しただけでは鮮明に浮上ってこない〉(DURM p. 3) といっている．文体が未完であるだけに TO は他の Malraux の作品に劣らず，ある意味ではそれ以上に難解だといわなくてはならない．

TO は小説ではなくて essai である．その Indication に記されているように，25才のフランス青年 A. D. と23才の中国青年 Ling とが，前者は中国旅行中，また後者は欧州旅行中にお互に交換した書翰の中から作者が任意に選んだ18通（そのうち6通は A. D. から Ling へ，残りの12通は逆に Ling から A. D. へ）の書翰からなっている．書翰形式の作品は別に目新しいものでもあるまいが，書翰のやりとりということから対話的性格をもつといえよう．このような対話的性格は後年の小説，エッセイを通じて Malraux 作品の構成の一つの特徴のようである．

Picon は TO を〈欧州の pragmatisme が出口なしの対話のうちに東洋の sagesse と対立する作品〉(MPLM p. 34) だと評している．Hoffmann はまた〈dialogue というよりむしろ antagonisme が特に TO の重要なテーマの一つだ〉(HM p. 34) といっている．要するに TO は書翰体・対話体という表現形式をもつばかりでなく，内容的にも対立的性格をもつといえるであろう．Malraux は自ら賛美する造形芸術の作品が〈王者の monologue で

はなくて不屈な dialogue を続ける〉(VS p. 67) といっているが，このことはその傍証となるだろう．しかしながら，Chaigne は〈TO の内容により適切な題名は La Tentation de l'Orient がよいのではないかという見解は当らない．Ling にしても Malraux の代弁者であるようにみえる〉(VOE p. 157) といっている．事実，Malraux 自身が TO の冒頭で〈Ling に極東人の象徴を読みとらないように！〉(TO p. 11) と記している．さらに Picon は〈フランス青年 A. D. は Malraux 自身である〉(MPLM p. 15) といっている．以上を要約すると，A. D. も Ling も Malraux の分身に過ぎないし，分身相互間の対話のうちにその思想が述べられているといえるであろう．

TO の初版は1926年であるが，その1956年版の最終ページには〈1921—1925〉と記されている．これはこの作品の着想，創作，完成までの期間を示すものと解される．1921年といえば1901年11月3日生れの Malraux は弱冠20才の青年であった．したがって TO は作者が20才から24才までの間に書かれた初期の作品の一つである．自ら出陣したスペイン内戦の前線から原稿を書き送ったと伝えられる小説 "Espoir" (1937) に比べると，この TO は小品ながらかなりの年月をかけて書かれたものといえる．参考までにつけ加えると，造形芸術に関するエッセイである "Les Voix du Silence" の最終ページには〈1935—1951〉と記されていて，これには実に16年の歳月を費したことになる．

多くの研究者の期待と要望にもかかわらず，Malraux の文学的遍歴には不明な点が多く，その研究は将来にまつところが少くない．一体，Malraux はその文学観に基因するのであろうが，自己を語ることが非常に少い．したがってその Mémoires, Cahiers, journal, lettres などほとんど発表されていない．今問題にしている TO についても，その創作には前述の通り 1921—1925 という4年の歳月を費しているわけであるが，その間に彼が何をしたかは部分的にしか明らかにされていない実情である．幾つかの既存の研究の中で，1964年に発刊された Vandegans の "La Jeunesse Littéraire d'André Malraux" が，筆者の知る限りでは最も詳いので，主としてそれによって 1921—1925 の Malraux の活動状況，特に前後二回にわたる東南アジア旅行とその動機を探ってみたい．この研究書は "Lunes en papier" (1921), "Ecrit pour une idole à trompe" (1924), "Royaume-Farfelu" (1928) の三つの作品を中心にして，その間の Malraux の交友，出版，創作，作家としての資質とその展望などに照明をあてた極めて貴重な研究である．Vandegans はその Introduction の中で，Ce livre dessine Malraux avant Malraux. Mais pour établir qu' il n' y a qu' un seul Malraux (JLM p. 12) といっているが，このことは前述の萠芽説を別の角度から証拠立てたことになろう．しかし Vandegans も信頼すべき資料の不足を歎き慎重な態度を示している．

Malraux と東洋との初期の関係については1923年と1925年の二度にわたる印度支那（および中国の広東）への旅行を挙げなくてはならない．すなわちその第一回目の旅行は1923年秋行われた Clara 夫人同伴の印度支那旅行である．約一ケ月間北部の Tonkin 州に滞在した後 Saigon にもどり，友人の Chevasson を加えて Cambodge の Ankor 遺跡から程

遠くない Banteaï-Srey の第二遺跡の探索に出かけた．しかしそこで入手した浮彫7点は Pnom-Penh 帰着寸前に当局に押収されこれが裁判沙汰になった．こえて1924年7月に禁錮3年の求刑があって，Clara 夫人は単身現地を立って8月11日に帰国し，嘆願運動を起す（なおこの作品 TO は Clara 夫人に捧げられている）．Malraux は10月28日に禁錮1年・執行猶予の判決をうけ，11月1日に印度支那を立って帰国の途についた．

Frohock は TO について，Begun 1921, (...) and most probably was not put into final form until after the first Indochinese venture (MTI p. 6) といっている．さきに引用した TO の創作年代とほぼ一致するわけである．

第二回目の東洋旅行は1925年2月の再度の印度支那旅行である．Malraux は E. Wilson 宛の手紙の中で，その間現地で〈印度支那解放運動 Jeune Annam を組織した，また印度支那および広東における Kuomintang 国民党の commissaire 委員になった〉(JLM p. 240) といっている．また同年6月には自由新聞 "Indochine" の創刊に協力し，自ら同紙に論陣をはった．しかしそれは人間の条件の思想を述べたものではなく現地の時局問題の論評である．この自由新聞は創刊から約二ケ月後8月14日号で廃刊になった．その直後 Malraux は中国の広東へ渡り約二ケ月間広東政府に協力したことはほぼ確実である．間もなく病をえて Saigon に引揚げ，1926年春には帰国している．

以上不明な点も多いわけであるが，二度にわたる Malraux の東南アジア旅行をこのように概観しただけでも，第一回目の旅行 (1923) は第二の小説 "La voie Royale" (1930) の，そして第二回目の旅行 (1925) は第一の小説 "Les Conquérants" (1928) のそれぞれ背景となっていることは明らかである．このように二つの旅行体験とそれらを背景とした二つの小説とが年代的に逆になっていることは注目に価する．このことについては Cl. Mauriac が〈純粋に美学的な見地からすれば第二の小説 VR は第一の小説 C より見劣りがすることから前者は後者より先に構想がもたれ下書されさえしたと考えるべきではないか〉(MMH p. 36) といっている．このことを引用しながら Vandegans は〈Mauriac はその後 Malraux 自身に問合せてそれを確認しているので，確定的だ〉(JLM p. 255) といっている．

さて，問題の TO の観点からすると上述の二度の印度支那旅行は直接 TO に関連する面が少いという印象を否定しえない．TO に関してはむしろその旅行の動機の方がより興味があるように思うので，同様に Vandegans に従って以下少しばかりその動機を述べておきたい．

Malraux がその旅行目的地として印度支那（および広東）というアジアの土地を選んだ理由の第一は，彼はすでにアジア大陸の諸事情に通じ特にその芸術に親近感を抱いていたこと，すなわち印度支那やシャムの考古学上の学術資料を読んで当時すでに着手されていた現地調査を一歩進めてみたいという気持になっていたことである．このような学術的動機のほかに Ecole des Langues Orientales——この東洋語学校で Malraux は学んだ——の Paul Boyer，および Musée Guimet の Jules Hakin の両氏の勧告によって Malraux は

一層その気になった．特に Hakin は東アジアや東南アジアの事情について Malraux を啓発し，考古学的調査の見込をつける資料を提供したらしい．このような現地調査は行動の哲学的要請と同時に学術的芸術的興味を満足させるのに格好な方法であった．さらに，当時完全な独立を熱望していた Malraux にとっては経済的な理由もあったはずだし，Cambodge の奥地への考古学的調査旅行には当時ようやく印度支那の考古学的開発が盛んになり浮彫などを切取ってくれれば相当高価に売れる見通しがもてたからである．その他種々の理由があったであろうが，なかでも個人に根拠をもたない文明を近くから研究しようという宿望が大きく作用したといわなくてはならない．Malraux は新しい意味合から彼が属する文明を屈折さす可能性を啓示するような遠い世界 univers lointain との接触をもともと願っていたのである．

以上は Vandegans の動機説であるが，TO の研究に当ってわれわれは特に次の点に注意しなくてはならない．すなわち上述の宿望や遠い世界との接触が少くともある程度は実現されたであろうという推測が必ずしも不可能ではないということである．

Malraux は作品の多い作家ではないにしても，その思想内容は大きく深いものが少くないといえるであろう．今 TO を考察するに当って萠芽とはいえやはり多くの問題点が見出されるわけであるが，本稿ではその中の比較的重要と思われる問題を三つだけ掲げ(II)，次に TO とその後の作品との関係，すなわち萠芽がいかにのび発展し変貌していくかを確認する意味での一つの例（III）を示したいと思う．

II

L'homme est mort, après Dieu.

第一次世界大戦後間もなく Malraux は神に次いで人間も死んだといっている．すなわち〈われわれにとって絶対的な現実は神であった．次いでそれは人間に変った，しかし人間は神に次いで死んだ．しかも欧州の人達はその異様な遺産を託すべき存在を探し求めて苦悩している〉(TO p. 174) というのである．それから約20年後，すなわち第二次世界大戦直後 Malraux は UNESCO での公演でこの同じテーマに触れて，〈19世紀末にかの Nietzsche は，むかしエーゲ海沿岸地方で聞かれた古代人の言葉を復活させて“神は死んだ”と叫び，この言葉に悲劇的なアクセントをおいた．今日われわれに課せられた問題は，この欧州の古い土地で果して人間が死んでいるか否かを知ることである〉(HP p. 51) と Malraux は熱弁をふるった．さらに彼は1948年3月5日 salle Pleyel で行った“Appel aux Intellectuels”の中で，〈欧州の今日のドラマは人間の死にほかならない〉(Cpostface p. 240) ともいっている．すなわちこの問題は Boisdeffre が指摘 (AM p. 111) しているように，“人間とは何か”という Malraux 文学の中心課題の一つであって，それが TO の中にすでに相当明瞭に示されているのである．なお小説 C の Garine は自ら athée 無神論者だと言明し，また Tcheng-Daï も自らを無神論者だと思いこんでいるが，Malraux の人物はすべて無神

論者だといえるであろう．しかし Malraux は日常生活では少くとも表面的にはカトリック信者であって，彼の無神論は思想上の問題にすぎない (AM p. 155).

Au centre de l'homme européen, est une absurdité essentielle.

〈christianisme は個人に対し自己についての意識 conscience をもつように仕向ける〉(TO p. 35) また〈諸君の個人的存在が実在することを諸君に信じさせようとする宗教がある〉(TO p. 46) という．すなわち欧州の個人主義は宗教的原因によるものだという考え方である．次に〈西欧精神は世界を人間の中に持込もうとする〉(TO p. 155) というが，このことは西欧が個人の優位を確立したという意味ではないだろうか．しかしそれは人間の死とともに崩れ去ったと解すべきであろう．神はすでに存在せず，人間も死んでしまい，個人の優位も有名無実になった今，われわれ個人は何によって生きるべきか，一体個人とは何なのか．〈いかに強力に自分自身を意識しようとしても一連の無秩序な感覚から脱し切れない〉(TO p. 102)，〈自己をいたずらに探求すること，あるいは自己から逃避すること，これらはいずれもばかげたことだ〉(TO p. 111)．だからといって，〈進んで犠牲を払うにたる理想は存在しない．あらゆる理想は虚偽だということをわれわれは知っているからである．われわれには真実 vérité が何であるかが全く解っていない〉(TO p. 216) のである．さらに〈欧州人の中心には本質的な不条理 absurdité が存在していて，人生の大変動期をこれが支配する〉(TO p. 78)．真実が不可知で，よるべき理想もなく，自己の中に閉じこもることも自己から逃避することもすべてうけいれられない．なにか変動が起きると不条理の壁につきあたる．まさに苦悩と絶望の淵におちこむよりほかはあるまい．しかし不条理の世界であっても結局そこに踏止まって，とにかく一歩踏出すよりほかに方法はない．この第一歩を踏出すとき，〈われわれは必ずといってよいほど不可解なもの，不条理なもの，つまり個人の極限の壁につきあたる〉(TO p. 168)．孤独な歩みは結局迂回路を通ってやがて自己に立戻り自己の中に閉じこもることを余儀なくせしめるであろう．そしてこの孤独な道を歩まないためには少くとももう一人の別の個人とともに現実の世界へ地道に歩きだすよりほかに方法はあるまい．要するに現実の行動に移り経験を積むことである．しかし Malraux はいたずらに行動に走り盲目的に経験に追従するのではない．〈出来るだけ幅の広い経験を意識に変える〉(E p. 389) のである．Malraux はこの"経験"と"意識"の両面から人間の根本問題を追求して行くもののようである．

Ce grand spectacle troublé qui commence, c'est une des tentations de l'Occident.

"西欧の誘惑"というこの作品の表題は何を意味するのであろうか．〈欧州の不快，不安 malaise は生来の自由活達さの欠如の発見が心ある人達に抱かせる不快感，不安感である〉(TO p. 142)．――われわれの祖先はメキシコの王宮の庭園のたたずまい，その地下室のコレクションの驚異，その他西印度諸島の小人の眼に宿る異様な悲嘆，これらを発見してとまどった，しかしやがて順次これらに打勝った．Napoléon が収集した絵画がその継起性

の理由だけで絶対的自信をもっていた芸術家達の心をかき乱したあの Louvre 美術館においてもわれわれは同様に打勝ったことを確認できる．しかし今世紀初頭以来フランスへ侵入してきたものは欧州のものでもなければその過去でもない．世界が欧州へ侵入してきたのである．しかもその世界はその現代と過去を残らず背負って，また省察のすでに死んだかあるいはまだ生きている形態を山積した供物を捧げて侵入してきた世界である．——〈このように今始まったばかりの混沌たる大スペクタクルこそ西欧の誘惑の一つである〉(TO p. 143)．およそ難解な表現であるが，要するに異質な文明を具体的具象的に表現する作品を眼の前にしての欧州の心ある人達のとまどい，期待，奮起，克服意欲ということではあるまいか．Malraux はもともと歴史の余白に見出される広い意味の芸術作品に心をひかれるようであるが，それは問題を提起するという意味で彼の関心を呼ぶのだと推測される．後年〈19世紀末が日本ものと中国ものとの知識をえたとすれば，今世紀末は日本と中国，そしてさらに西欧絵画に匹敵する唯一の絵画の知識をもつことになろう〉(VS p. 42) と期待をかけているのもその間の事情を語るものであろう．要するに Malraux は前項で引用した VS の最終ページの〈1935—1951〉の1935年より10年以上も前から芸術に関心を示しているわけである．そして彼にとっては芸術の問題はさきに述べた“人間とは何か”という設問と無縁でないばかりでなく，むしろそれらの問題は密接に結びつき絡み合うもののようである。

III

前述の通り，TO の中に発見される萠芽がその後の作品（小説）でどのようにのび変貌するかという問題の一例として，amour と érotisme すなわち女性問題を考察することにしたい．最初に指摘しなくてはならないのは，Malraux の作品特に小説の中には女性があまり現われないし，女性問題はさほど重要視されていないということである．

Picon によると，〈Malraux は過去において倫理，恋愛，幸福などの問題を避けて通ったわけではないが，それらについては作品の中では何も語らない．勇気のかたまりのような人間のイメージしか示さない〉(MPLM p. 65)．また〈かって殆んど唯一のテーマとして恋愛を扱ってきた個人主義的ブルジョワ文学に対し，Malraux は男性の友愛の文学を対立させる〉(MPLM p. 67) と Picon はいっている．これに対して Malraux は〈現代小説は，わたしの眼には，人間悲劇の特権的表現方法の一つであって個人の解明ではないようにみえる〉(MPLM p. 66)，さらに〈小説家は人物を創り出すべきだとは思わない，特殊な粘着性のある世界を創るべきだと思う〉(MPLM p. 38) といっている．要するに個人主義を排し，創作の重点を小説の人物におかないで小説の世界を描き出す点におくのが Malraux の創作態度だといえるだろう．そしてこのような創作態度からは個人主義的交際，恋愛などすべてかげのうすい問題としてやがて片隅に押しやられるのではないだろうか．

萠芽説によって TO から女性問題をみて行くのが順序であるが，ここであらかじめその後の小説 C. VR. CH について女性問題を概観すると，amour については CH の Kyo

と May の関係，また érotisme については各小説の所所で話題になり，または小説の舞台へ一寸顔を出す無名の女性とりわけ娼婦，その集約的存在ともいえる Ferral の情婦 Valérie を挙げることができる．そして一般的にいえば amour よりは érotisme の方が量的にも質的にも多くの問題を提起するはずである．

さて，TO に基いて Malraux の女性観を探ってみよう．情熱の中でも amour ほど人間の動物性をゆさぶりそれを目覚めさせるものはない．確かに女性は芸術作品と同じように関心をよせるに足る美しい存在である．正妻，内縁の妻，娼婦にはそれぞれの役割がある，好色女は全然好ましくない，etc. 要するに〈男性と女性は異なる種族に属するものであって，女性を理解しようとすれば男性は女性に段々と同化してしまう〉(TO p. 86). 夢も一種の行動であるが，消極的想像によって支えられ，不本意なすりかえ substitutions involontaires によって成立つ．そしていかなる恋愛遊戯もそれに似ている．なぜならそこでは，〈自分自身であると同時に相手の女性になろうとする〉(TO p. 102) からである．そこでは自己の感覚や興奮を経験すると同時に相手のそれらを想像するからである．またそこには夢におけると同様に不本意なすりかえがあり，あるいは二種の物質が互に作用してその成分を交換して新に二種の物質を生じる変化，すなわち複分解 dédoublement (TO p. 102) があるからである．要するに通常の恋愛行為，sadisme, masochisme, その他の感覚に至るまで，これらはすべて古代から絶えることのない宿命の威力の最後の姿ともいえる上述のようなすりかえないし複分解的二重性に支配されるのである．

Hoffmann は Malraux の érotisme は〈肉体だけでなく精神や知性に関係をもつ現実〉(HM p. 171) だといっているが，それは本質的には頭脳的 cérébral なのである．さらにいえば，それは悲劇的 tragique な性格をもつに至るであろう．

以下 "征服者" C. "王道" VR. "人間の条件" CH の三つの小説についてこの問題のその後の推移を考察するに当って，敍述を簡明にするために主な事項だけを列挙して概観することにしたい．

小説 C (1928)—

① Rebecci は中国婦人と結婚していながら，植民地的 érotisme にとりつかれしばしば少女をはべらせるが，彼はすでに老い秘蔵のエロ本には興味を失っている．しかし彼の面目はほかにあって，Garine の信任あついテロリストのリーダー Hong の精神的育ての親は彼なのである．

② 冒険家と革命家を兼ねたこの小説の第一の人物 Garine は部屋を訪れた語り手 je に〈この土地へ来てしばらくすると中国女性が神経をいら立たせるようになる．今に君にもわかるよ．静かに真面目な仕事に専念したいときには女たちとねてすっかり忘れ去るのが上策だ〉という．

以上 Rebecci と Garine の例はほんの一時的な軽い植民地的 érotisme といえよう．

小説 VR (1930)—

① Perken は小説の冒頭で érotisme の話に花を咲かせる．そしてその話は sadisme, masochisme へと進む．やがて〈大事なことは相手の女が異性であることが解らないことだ〉,〈娼婦達はまともでない男達を頭脳派 cérébraux と呼んでいる〉(VR p. 10) と語る．

② Claude と Perken の対話—— Grabot はこの未開の土地へ何をしにやってきたのだろう？（答）第一に érotisme だ．彼にとっては人間の pouvoir 能力は性的可能性によって測定されなくてはならない．命をかけることに，例えばサソリに故意に刺されることに快感をおぼえるのだ…

③ Perken は最後に死にのぞんで，ひとときをともに過した相手の感覚は遂に知る由もなかった．そして彼は再び死の苦悩に襲われたのである．まさに悲劇的 érotisme というべきであろう．

④ Perken と死について語った後 Claude の胸の中には死の厳然たる支配力が性的欲求と同じほどに絶対的な響となって残った．

⑤ Malraux の小説の人物すべてに共通する意欲としてしばしば引用される〈この地図の上に傷痕を残したいのだ〉という Perken は〈女性に対する欲求と同じほど強力にそうしたい〉とつけ加える．

このように Malraux の érotisme は VR の最後に至って悲劇的性格をもつようになる．なお④と⑤は érotisme が頭脳的であるだけに他の重要な問題に関連をもつ例である．

小説 CH (1933)—Goncourt 賞に輝いたこの小説では，érotisme はそれまでの性格を保ちながら，さらに幅の広いものとなり amour の色彩をおび，最後には fraternité 友愛へと移行するかにみえる．ここでは érotisme については Ferral と Valérie の例を，また amour については Kyo と May の例を挙げるに止める．しかしその前に VR の場合と同様に érotisme が他の重要な問題と関連する例①および②をみておきたい．

① VR の Grabot は故意にサソリにわが身を刺させるが，CH の Tchen は冒頭の殺人遂行に先立って短刀で自分の左腕を刺す．彼は後にガラスの破片を自分の腿へ突き刺すことも敢行する．これら三つの例は masochisme 的性格をもつものではないだろうか．

② 暗号用レコードに吹込んだ自分の声を試聴してレコードを間違えたのではないかと不安になる Kyo に対して，Lou は自分の声を喉からではなく耳から聞いたとき直ちに確認できることは極めて稀だと説明する．このことは Kyo には大きなショックであってその印象はその後何度も折にふれてよみがえる．Malraux は後年，〈自分の声を喉からではなく耳から聞いて識別できなかった男の話を書いたことがある．わたしはそれを“人間の条件”と名ずけた〉(VSp628) と書いている．Gisors は鏡に写った自分の姿をみてすぐにはそれが自分だと解らなかった経験を語る．これらは前に述べた TO の〈自分自身であると同時に相手の女性になろうとする〉こと，〈相手の女が異性であることが解らない〉ことおよび Perken の未確認に終った経験と内面的関連性がなくはないであろう．

③ Valérie は Ferral の情婦である．彼女は男性と同じように頭脳派で誇りをもっている．そして女性の érotisme を論じ，男には女を語る資格も能力もないという．また Ferral

に対し〈あなたは女性も一個の人間であることに気付かないまま死んでしまうでしょう〉と書き送る．そして遂に Valérie は Ferral を怒らせてしまう．Ferral が Gisors に〈女性を知ろうとすれば女性なしですますか，女性に復讐すべでしようね〉というのに対し，Gisors は〈人間一人を知ることは消極的な知覚にすぎない，積極的な知覚とは愛するものに異邦人としてしか接しえない人間の苦悩だ〉と答える．また Ferral は〈男は女を否定しうるし，またそうしなくてはならない〉，〈érotisme は結局自分に，また相手に，そして恐らく両者に屈辱感 humiliation を与えるものだ〉と考える．

④ Kyo は妻の May にその不倫行為を打明けられて大きなショックをうける．そのようなときでも，もし彼女が死んだら今までのように希望をもって革命に奉仕できなくなるに違ないと考える．そして彼の心を乱し彼を苦悩の底につき落すこのショックは単なる憎悪でも嫉妬でもなく，"とき" や "死" と同じように破壊的な一種いうにいわれない感情に変り，それによって突然自分が妻から引離されてしまったという感を拭い去りえない．そしてそのことは後まで尾をひく．すなわち Kyo が死を覚悟して家を出ようとするとき，May が同行して運命をともにしたいと強く望むのに対し，さきのいまわしい思出が Kyo の胸によみがえる．押問答の末 Kyo は――ほとんどすべての男は misogyne 女嫌いだということはよく解っていながら――愛するものを死の道づれにすることを容認するのは恐らく愛の完全な姿であろうという理解に達する．しかし Kyo はなかなか決心がつきかねて May を不憫に思う．要するにこのような愛は深い苦悩に満ちた悲劇的な amour だといわなくてはならないであろう．

IV

Malraux 文学の中における "西欧の誘惑" の重要性はかねてから多くの研究者から指摘されていた．そのような通説にしたがって TO に接近し若干の問題を考察した．第二項で触れた "神の死と人間の死"，"不条理の威力"，"西欧の誘惑の一面" の各問題はいずれも Malraux 文学全般にわたる極めて重大な問題であってそれらの一端に触れたに過ぎない．これに反して第三項で述べた érotisme および amour の問題は前にも述べたように Malraux 文学全体からみれば比較的重要性のうすい問題である．Malraux の無神論は思想上の問題であって日常生活では彼もカトリック信者だということはさきに指摘した通りであるが，それと同じようにその異常ともいえる érotisme も文学上の問題に過ぎないということは，これまたさきに引用した〈彼は倫理や恋愛を避けて通ったわけではない〉という Picon の言葉からも容易に推測できるであろう．Malraux の érotisme は他の重要な問題と関連性をもち，それなりに作品構成上の一要素となっている．そしてそれはこの作家の個人的性向や実生活とは本質的に次元を異にする小説の世界に属する事象だと考えるべきではないだろうか．

われわれは Malraux の érotisme の問題を初期の TO からはじめて，C. VR. CH と各小説の創作年代を追って考察し，Rebecci. Perken. Ferral の各例にみられるように，彼の

érotisme が植民地的，悲劇的，屈辱的と順次その性格を変える経過をみた．しかし次の小説 TM (1935) ではその érotisme は急激に姿を消し，その次の小説 E (1937) においても，Sérugier が娼婦達と言葉が通じないそのことだけでイタリヤ側のスパイの嫌疑を受けた話題 (E p. 136) を除いてはこの問題は作品面から消滅する観がある．

CH の Kyo と Mayの amour は死に結びつく悲劇的なものであった．しかし彼等は両者とも革命の闘士であるだけにその amour には同志愛的性格がかなり明瞭に認められる．小説 TM の Kassner が妻の Anna に対して示す美しい amour には Kyo と May の amour のような悲劇的性格は薄らいで同志愛的な性格がさらに強くなるようにみえる．

他方，〈屈辱 humiliation の反対は友愛 fraternité〉(E p. 206) だという小説 E の Manuel の言葉に，〈人間の威信 dignité は屈辱の反対〉(CH p.234) だという小説 CHの Kyo の言葉が対応する．そして Ferral が érotisme に発見したのも屈辱であった．このようにみてくると屈辱という言葉は Malraux 小説の鍵 mots-clés の一つであるといえるかも知れない．しかしこの屈辱を媒介として érotisme が fraternité に変貌する必然の糸は見当らない．

Malraux の érotisme および amour は CH に至って一つの盛り上りを示しその頂点に達するかにみえながらその後は急激に小説の世界から後退して行くのに反して，友愛は同じ CH の後半から大きく上昇カーブを示しその後の小説 E および NA までその高度を保つかにみえる（この友愛の問題については本学会支部会誌「フランス文学」2・3合併号および4・5合併号の拙稿参照）ことは注目に価する．友愛から一歩進んだ〈人類愛こそ運命に対抗する砦〉(MPLM p. 93) にほかならないからである．

一般的にいって érotisme は快楽に通じ少くとも一時的逃避を可能にするであろうが，Malraux の érotisme は頭脳的あまりにも頭脳的であるだけに快楽も逃避も許容しえない性格をもつといえなくはないであろう．érotisme と同じように alcool や opium も一時的快楽，逃避を可能にすると一般論的にはいえるであろう．しかし alcool に苦悩を紛らしながら遂に救われなかった CH の Clappique のような人物はその後二度と Malraux 小説に現われない．またopium に一時的安らぎを求める習慣をもつ Gisors が息子の Kyo の悲劇的な死にショックをうけて吸飲道具一式を暗い戸外へ投げすてる光景は極めて印象的であると同時に何ものかを象徴しているとさえ思われる．

註：本文中で使用した略号は次の通りである．なお年号が二つ掲げてあるものについては後の方の版を引用に使用した．

André MALRAUX

Oeuvres: -

TO: LA TENTATION DE L'OCCIDENT Ed. Grasset, 1926—1956.
C: LES CONQUERANTS Ed. Grasset, 1928—Le Livre de Poche 1963.
VR: LA VOIE ROYALE Ed. Grasset, 1930—Le Livre de Poche 1964.
CH: LA CONDITION HUMAINE Fd. Gallimard, 1933—Le Livre de Poche 1963.
TM: LE TEMPS DU MEPRIS Ed. Gallimard, 1935.
E: L'ESPOIR Ed. Gallimard, 1937—Le Livre de Poche 1963.
NA: LES NOYERS DE L'ALTENBURG Ed. du Haut-Pays, 1943—Gallimard 1948.
VS: LES VOIX DU SILENCE Ed. Gallimard, 1951.

Etudes: -

JLM: VANDEGANS André; "La Jeunesse Littéraire d'André Malraux" Ed. J.-J. Pauvert, 1964.
DURM: FITCH Brian T.; "Les deux univers romanesques d'André Malraux" Ed. Archives des lettres modernes, 1964.
HM: HOFFMANN Joseph; "L'Humanisme de Malraux" Ed. Klincksieck, 1963.
MPLM: PICON Gaëtan; "Malraux par lui-même" Ed. Seuil, 1960.
AM: BOISDEFFRE Pierre de; "André Malraux" Ed. Universitaire, 1960.
VOE: CHAIGNE Louis; "Vies et oeuvres d'écrivains" Ed. F. Lanore, 1957.
MTI: FROHOCKW. M.; "André Malraux and the Tragic Imagination" Ed. Stanford University Press, 1952.
HP: SIMON P.-H.; "L'homme en procès" Ed. Baconnière, 1951.
MMH: MAURIAC Claude; "Malraux ou le mal du héros" Ed. Grasset, 1946.